ニューヨークのユダヤ人たち II

ある文学の回想 1940-60

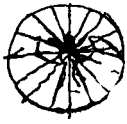
A.ケイジン著
大津栄一郎・筒井正明訳

岩波現代選書

ニューヨークのユダヤ人たち II

—ある文学の回想 1940-60—

A. ケイジン著
大津栄一郎・筒井正明訳



岩波現代選書

ニューヨークのユダヤ人たちII　岩波現代選書 127
一九八七年五月二七日　第一刷発行©
定価二一〇〇円
訳者　大津栄一郎　筒井正明
発行者　緑川亨
発行所　株式会社　岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京六-二六二四〇
印刷・理想社　製本・桂川製本
落丁本・乱丁本はお取替いたします
Printed in Japan
ISBN 4-00-004796-5

目

次

6 かつてない幸福な時……1
7 時代なればこそ……71
8 新生活……125
9 六〇年代の青春……181
10 ことば……243
訳者解説……303
あとがき……319

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

〔I巻目次〕

1　ことば
2　ミッドタウンとグリニッチ・ヴィレッジ
3　お前は自分の生活を変えねばならないのだ
4　戦時の旅行
5　イギリス――最後の戦闘

6　かつてない幸福な時

戦争からニューヨークという豊かな大都会に舞いもどったというのに、住む場所がひとつも見つからない。どの家主に当たっても、この街は「満員」だという返事ばかり。部屋を断わられるたびに、ぼくには満腹の腹をさすりながらご馳走を追いかけている人々のさまが浮かんだ。ところが、『フォーチュン』の表紙の仕事をしてとつぜんの大金を手にしたソール・ベローの友人の画家が、ブルックリン・ハイツのパイナップル・ストリートにあるおんぼろの古いアトリエを提供してくれるという。

その画家は温和な、大柄の、予言者のような風貌の人物だった。なにかの説明をするときも、声はあくまでも深みがあり、おのが腹という中核から宇宙的理論を雷鳴のごとくひびかせる趣きがある。発せられることばが完全な文章体になっていないときでさえ、その説明が意を尽くさないということはない。とっくに崩れ落ちてしかるべきアトリエがいまだ残存していたのも、みずから無類の自信をもちながら友を助ける彼なればこそであった。友人たちは彼と触れ合うことによって自分の知らない自分を知らされた。のちにベローは『オーギー・マ

ーチの冒険』の終わり近くの救命ボートの場面で、彼を使うことになる。原形質を合成したといって、生化学の大発見にともに名を連ねるようオーギーをさそう気違い科学者が彼の役どころである。その場面では、船が大嵐に遭い、救命ボートに彼と二人残されたオーギーがひたすら聴き役にまわされる。『オーギー・マーチの冒険』が一九五三年に出版されたとき、世界のこっけいな部分、あるいはこっけいなものと化した世界、に対するベローの感覚の深化にぼくは思わずうなったものだ。「どうしてぼくのまわりには理屈屋しかいなかったのだろう？」なるほどベローの友人というのが決まってインテリだったし、またインテリというのがベローの攻撃目標であった。彼はインテリなるものに呪われ、魅せられ、自分と共通なものが一部分しかない人間だけしか知らないことに自責の念をおぼえていた。「救命ボートのなかの男がだれのことか分かったかい？」と彼が誇らしそうに訊く。ぼくが気づかなかったことを知ると、おどろき怒り、「かつてのきみの家主、エイモスじゃないか！」と大変な剣幕である。ポール・グッドマン、ノーマン・メイラー、アイザック・ローゼンフェルド、その他多くの古風なモラリストたちと同様、彼もライヒ〔ウィルヘルム・ライヒ。ドイツ生まれのアメリカの精神分析学者〕的な分析をおえ、すべての時代、すべての人間に対しておのが発言の権利を要求できるまでになっていた。ぼくたちは解放されたのだ。ベローが有名になるにつれ、語るべき多くのものをもっているというその自意識は他の人間たちの愚かしい無理解という侮辱を受けるようになった。すべての批評家の例にもれず、彼を失望させることがぼくの人生での役目となっていく。

わが家主はやがて姿を消し、パイナップル・ストリートはあの甘美なる尊大さから放免された。彼がアトリエの壁に残していったたくさんの絵――「ぼくの本当の作品だ。ルースのためにやる金儲けの作品なんかじゃないぞ」――は、ナチ強制収容所の有刺鉄線のなかに立ちつくす衰弱しきったラビたち、ナチ衛兵の軽蔑しきった眼の下にうなだれる、骸骨のように痩せ衰えた乙女たち、黒い大理石のような眼でガス室送りの順番を待つユダヤ人の子供たちなどを描いたものだった。光沢のある、やたら濃い厚塗り（インパスト）で描かれ、極端に多彩色の潤飾がなされているため、暗闇のなかで見ても背すじに冷たいものを覚える。こういう絵に囲まれていると、なにやら裁きを受けているようで――〝あなたは黙って手をこまねいていた、私たちもなにもしなかった、でも私たちのこの姿を見るがいい！〟――、一週間もすると、絵を取りはずすことを思いついた。悪趣味の、気分が悪くなる絵だ。ニューヨークでは残虐は容易である。

パイナップル・ストリートのアトリエはフルトン通りの末端、ブルックリン橋のたもとの、いまにも朽ちそうな古ぼけた農家のなかにあった。廊下は古い暖炉の臭いがする。その昔、ブルックリン・ハイツの市民たちが母国の移民船の入港を文字どおり見おろしながら、冬のさなかウォール街の会社へと歩いていった時代に建てられたものだろう。通りの向かい、ゴミ缶のうえの、油に汚れたギリシャのスプーンが飾ってあるうしろの板は、一八五五年七月四日、気分の向いたときにしか仕事をしないある印刷工がローマ・ブラザーズ印刷所で『草の葉』初版本の印刷をおこなった場所を示している。

海軍造船所から来る船乗りたちに人気のあるバー兼用レストランや街区のラジオ店からいろいろな騒音がもれてくる。夜ともなると、セント・ジョージ・ホテルのうえの狂ったように明るいネオンサインや、通りのまむかいの映画館の明かりなどがぼくの部屋の窓べに色あでやかに踊り映えた。暖かい陽気のときには映写係がドアを開けたままで上映をおこなうため、サウンドトラックから脈絡のないバックグラウンド音楽の一節や声高の怒鳴り合いの声などが聞こえてきたりもした。

パイナップル・ストリートなるぼくの二部屋に侵入してくる音はこれだけではない。となりの部屋の隣人、コロンビア出身のフェリペッツなる人物が、毎朝の五時、ぼくの寝室のむこうの自室の木の廊下をドスンドスンと足音高くベイ・リッジの自動車整備工場の仕事に向かうため、いつも眼をさまされてしまう。最上階の我々の二つの「部屋」は、ビーヴァボード(木繊維で作った軽くて硬い代用板。急造の間仕切り等に用いる)で間に合わせに仕切られており、ドアも二人とも使用できないよう、部厚くペンキを塗り、シールを張って、つや出ししてある。フェリペッツ氏の廊下でおこなわれることはすべて細大もらさず音としてぼくの耳に入ることになる。毎朝、まだ明けやらぬうちから、フェリペッツ氏の咳払いの音、フェリペッツ氏のトイレに行く音が聞こえ、次いでフェリペッツ氏の重々しい足が廊下を伝い、ぼくの寝室の壁のむこうを登って、ますます大きな足音をひびかせながらドアへと近づき、ついにはバタンと大砲のような音をぼくの耳にとどろかせ、さらにそれに負けず劣らずのドスンドスンという音を階段にひびかせてくれるため、ぼくはすっかり眼がさめてしまう。

これにはなす術がなかった。別の部屋で寝てみたのだが、あの音になんの変化もない。一度、もう少し軽い足取りで仕事に向かってはもらえないだろうかとフェリペッツ氏に頼んでみたことがある。彼は満面これ笑みといった顔で金歯をやたら見せ、こちらの頼みはひと言も理解できないまま、手がちぎれんばかりの握手をして、そのまま笑みをたやさず引き上げていった。この家はブルックリン・ビーチに打ち上げられ朽ちんとしている廃船さながらで、オーデンが微笑みながら、「まこと、ここは田園の静けさが領している！」と言ったモンタギュー・テラスの邸宅、あるいは、大いなる港のちょうどとまり木にあたるコロンビア・ハイツに立つ、やがてメイラーが居をかまえることになる美しい褐色砂岩（ブラウンストーン）の旧いマンションとは天国と地獄の差があった。

朝まだき、この眠れぬ数時間は所在なくも美しいものであった。寝ているぼくのまわり一面に港湾が広がり、一街区ほどの距離から曳き舟の霧笛が聞こえてくる。夜明けどきベッドから起き上がると、我が家主の画家の天窓と大きな北窓が海の光に洗われている。無伴奏組曲（バルティータ）と格闘しながらバッハを相手にコーヒーを飲むと、手さぐりしながらタイプライターへとたどり着く。その頃、ぼくはニューヨーク夢想歩きの経験にもとづき、この大都市全体をテーマとした脈絡のない部厚い本に取りかかっていた。思索をおこない、自分のなかに逃げ込み、過去を掘り起こすぼくの方法は散歩である。その本は眼についたもの、ビルの林、孤独、ぼくとニューヨークとの日々の闘いなどを扱ったものだった。早朝、フェリペッツ氏のために起こされると、ぼくはベッドに横になったまま、周囲の喧騒のなかか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

らどの構想を練ろうかと執拗に努める。夜は夜で、自分でもあきれるくらい毎日、たいがい他に客のいない、鋼鉄のひびきのするエレベーターに乗って、地下深くにあるクラーク・ストリート駅から街へと出てみる。セント・ジョージ・ホテルの空虚な黒い壁のまえを通ると、パイナップル・ストリートの我が家に着くまえに、ホテル周辺の閑散とした街路が眼にとまる。ホテルの玄関の階段すら、まるでいま消火が終わったばかりのような臭いがする。ぼくの友人たちはみなマンハッタンに住んでいて、そこから出てこようとはしなかった。夜間、散歩するぼくの耳朶(じだ)には、かすかな悲鳴と威嚇するような音が聞こえてきた。静まり返った死の街路に住まう亡霊たちのため、港のそばの散歩は影との恐ろしい対面となる。

パイナップル・ストリートのはずれ、古いヴィクトリア調の家並みのうしろに、港を見おろすかたちにプロムナードが造られている。渦巻くニューヨーク北部と空に跳ねるブルックリン橋の光景に、ぼくは古き隣人ハート・クレインを想った——

埠頭のかたえ汝が影の下、我は待つ
暗闇の中のみ汝が影あきらかに見え

五番街のはずれ五五丁目の粋な小さなアパートでの、ルイーズとのデートから戻ってくると、夜、ぼくは画家の天窓の下に閉じ込もり、震えながら、快適なる我が身の混乱を考えまいと努める。ぼく以外のすべてが描かれているニューヨーク散策のあの本と同じように、パイナップル・ストリートは

なにも知らなかった昔のぼくのなにかに触れてくるものがある。夜ごと、マンハッタンでの情事のあと、とぼとぼとブルックリンまで歩いて帰るなんてバカげているとルイーズはいう。その頃のマンハッタンは未曾有の豊かさ、なめらかさ、発展を見せていた。戦後ニューヨークの豊かさがルイーズとぼくの恋の一要素となっていた。古き戦争はなんとか終わろうとしていたが、アメリカとロシアがたがいに身構えるにつれ、世間の空気には新しい戦時中の高揚感があふれていた。旧共産主義者たちはウソをつかざるをえず、元共産主義者たちは軍需景気を直視できずに顔をそむけていた。ニューディール政策以降、国民を庇護してきた政府が、いまや、なにやら不安を感じさせる威圧的な権力を有するにいたった。

ニューヨークは勝ち誇り、光り輝き、かつてない無秩序の状態にありながら、しかも同時にかつてないほど「芸術的」であり、世界の首都、ヨーロッパ的知性の首都、アクション絵画（ペインティング）、全面的に解放された、個人的な、爆発せんばかりのアクションの首都であった。古きニューヨークのインテリのなかでもつねに最も洞察と懐疑に富むハロルド・ローゼンバーグが、アクション・ペインティングとは、「キャンバス、クソ食らえ」という画家たちの自由の表現である、と言い放つ日も近い。かつて、高架鉄道が黝（くろず）んだ丸石敷きの街路としっくりとした調和をたもち、シュティーグリッツ、ジョン・スロウン、E・E・カミングズなどの喜びそうなロマンチックな暮色に染まっていたこの地に、いまやニューヨークはアルミニウムと鋼鉄のビルの林——本来ビルのなかに収納されるはずのファイル・キ

ャビネットやコードシステムを外部に積み上げたかのごとき外観のビルの林をまとって立っている。街のいたるところに銀行がある。大いなるニューヨークの灯、ニューヨークのきらめき、比類ないニューヨークの尊大さが、かくも公然と顕示されたことは一度もない。パーク・アヴェニューを歩くだけで絶えずなにかの挑戦を受ける。会計係の帳簿の欄さながらのまっすぐの街路を見ると、思わず駆けだし、自分のゴールに向けてしゃにむに突っ走りたくなる。手近のゴールならいつだってある。上も下も、前も横も、貸借対照表のように数字が付され、たがいにからみ合って、大いなる都市の街並みは目くるめく力の広場であった。くっきりした外観の鋭さがいたるところ眼を射る。ニューヨークを表現する最も陳腐なことば——それは「信じがたい」だ。都市の美はそのあふれんばかりの力だけを養分として光り輝き、ドラマチックで臆するところがなく、天をめざし、サーカスさながら、「死をも恐れぬ」見せものが次から次へとくり広げられていく。五五丁目のルイーズの小さなアパートやマディソン街と七〇丁目の彼女の両親の大きなマンションからの帰り道、ぼくは新築のビルの周囲に行きかう街路の直線を心のなかでたどり直してみることがあった。それらの直線は、ぼくがかつて自分で計画していた目標の地点ではなく、直線みずから、その流れゆく地点へとぼくを連れていこうとしているように思えた。

帰還兵士たちを満載したクイーン・メリー号でのぼくは、このまま除隊になるのか、それとも日本へ派遣されることになるのか自分でも分からない十数名の兵士たちと起居をともにしている大きな船

室を離れるごとに、ぼくを待ち受けているルイーズの姿が思われたものだ。ぼくのところに流れ着き、まるで弾丸のように愛を狙っているこの心温まる美しさをもった、いつも押し黙った女から逃げようとしても無意味に思えた。ある暑い八月の夜、船がニューヨーク港へとたどり着くと、海岸線すべてが超豪華版クリスマスを祝うかのごとく輝いていた。ブルックリンのベイ・リッジに、スタテン島に、ガヴァナーズ島に、バッテリー公園に、ジャージーの海岸一帯に、何十万もの人がきがあふれ、赤い消防船や曳き舟が霧笛を鳴らし、小さな魚船が「兵隊さんご苦労さま　お帰りなさい」の大きな文字をつけて、湾内を行きかっている。その夜、ニューヨーク港のあらゆるところに光があふれているように思えた。ニューヨーク全体が、サンディー・フックから五九丁目まで、歓喜する一本の光線と化したかのようだった。ルイーズとぼくとがアメリカ兵のアメリカ帰還を見守りながら最上甲板に立っているとき、足取りも軽く周囲を往き来する兵士たちからはたった一つの歓喜の声しか聞こえてこなかった。母国に帰ったという歓喜。

しかしぼくの帰国の目的はルイーズではなかったはずだった。埠頭でぼくはもどかしそうに彼女と別れを告げた。だが、ナターシャとはもはや夫婦ではないということをぼくが永遠に理解したのは、その後何週間か経ってからだった。そして、ある夜、驚いたことに、パイナップル・ストリートのすりへった階段に、ぼくを待ち受けるルイーズの姿を発見した。かくしてこの美しい、よく気のつく、静かな情熱を秘めた――内面的な豊かさを感じさせるくらいに口数の少ない――しかしいつもありが

たい距離をたもってくれている女との新しい生活が始まった。
それはビジネスライクな趣きのある情交だった。莫大な遺産の相続人であるということが、人をいかに平穏な気持ちにするものか知るのは一つの発見であった。深く愛していると言いながらも、ルイーズがぼくのすべてを認めているわけではないことが明らかになった。著名なドイツ系ユダヤ人の流れを汲む身でありながら、彼女は、いまだ騒乱のソ連のなかでもがき苦しんでいるユダヤ人のことなどまったく理解を示そうとしなかった。ユダヤ人の不安といったものを彼女がまったく持ち合わせていないことに、ぼくは信じがたい思いがしながらも魅せられていた。彼女の大学時代のルームメイトはすべて、自他ともに認める反セム主義者（アンティ・セミティスト）だった。ユダヤ人などこの世に存在しないかのごとく振る舞っているユダヤ人というのがいるものだ。ぼくたち二人の楽しい組み合わせにはじつにたくさんの無言の制約があったため、輝かしいマンハッタン中央での輝かしい夜や、両親の営むコネティカットの農園での心浮き立つ週末なども、あらかじめ計画されたものであるかのように思えた。
愛の営みも時計仕掛けのようにおこなわれ、ときどき本当の時計仕掛けではないかと思えることもあった。反面、人生はいろいろな恩恵に満ちていた。ぼくは自分の恐怖を忘れようとしていたから、ぼくたち二人が、恋人として、新しい買い物の品のようにおたがいを物色しているのだというふうに考えることはできなかった。ぼくたちは大いなるアメリカ的生活様式に「順応」しつつあった。豊かさの時代がこの上なくやわらかな花床のごとく眼前を転がってゆく。カーネギー・ホールからのそぞ

ろ歩きが、ロシア風ティールームが、劇場が、五六丁目の二人のお気に入りのイタリアン・レストランでの食事が、なんと心はずむ夕べをつくってくれたことか。ぼくの掌に彼女の暖かい絹にくるまれた背中を感じるとき、五番街は文字どおり光り輝いて見えた。彼女の身体が早く欲しいという陶然たる思いにつつまれながら、すでに手にキーをもっている彼女のうしろから、階段を登るそのうしろ姿を見つめていると、厚いカーペットを敷いたアパートの階段が、ぼくの下でうめく彼女の肉体そのもののやわらかさに思えてきたりした。

我が子供時代のうえに燃えていた隠された神にこれほど近い、どこか恐ろしい、深味のある経験もないかのように思えた。ぼくの両親はまだ同じブラウンズヴィルの借家に住んでいた。ペンキ屋、「手造り」裁縫師の父のもとにはビッグマネーの報らせはまだ届いてないらしく、両親は二人が出逢ったときと同じくアメリカ一般からは取り残され、貧しい生活を送っていた。住まいも一度も変わることがなく、ますます希望とは縁のない生活だった。しかしいまや二人の周囲には、貧しいユダヤ人以上に貧しい黒人の数が増えてきた。毎週金曜日の夜、安息日の食事のため実家に帰ったときはいつも、ぼくは作品の素材として自分の子供時代のことを根ほり葉ほり聞き出そうとした——ザックマン・ストリートのはずれの工場の外に積み上げられていた服の新鮮な染め色、まるでベッサラビア〔ソ連南西の地方〕、ヴィルナ〔ソ連邦リトアニア共和国の首都〕、ミンスク〔ソ連邦白ロシア共和国の首都〕から転がってきたかのごとくローラーから勢いよく転がり落ちるセルツァー飲料水のことなど、など。儀式のよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo